

5 各教科の指導

国語、道徳及び体育の3教科について例示する。

【国語】

1 目標

学習指導要領における国語科の目標は、次のとおりである。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人とのかかわりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

「言葉による見方・考え方を働かせ」とは、子供が学習の中で言葉への自覚を高めることである。国語科では、様々な内容を自然科学等との視点から理解することを目的とはしておらず、言葉そのものを学習の対象としている。

「言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次の通り育成することを目指す。」とは、(1)から(3)の資質・能力を、子供にとって必要感のある言語活動をもって育成することを目指すということである。

この国語科の目標と、三つの柱である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力に基づき、2学年ごとに目標が示されている。例として、以下に第1学年及び第2学年の目標を示す。

[第1学年及び第2学年]

「知識及び技能」

日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。

「思考力、判断力、表現力等」

順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。

「学びに向かう力、人間性等」

言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

「知識及び技能」の内容は、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」、「(2)情報の扱い方に関する事項」、「(3)我が国の言語文化に関する事項」で構成されている。「第1学年及び第2学年」では身近なことを表す語彙を増やすことが求められている。

「思考力、判断力、表現力等」の内容は、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「C 読むこと」で構成されている。この学年では、経験したことや身近なことについて、順序に気を付けて話したり・聞いたり、書いたり、読んだりすることが求められている。また、「第3学年及び第4学年」では、目的を意識して、中心に気を付けながら話したり・聞いたり、書いたり、読んだりすることが求められて

いる。さらに、「第5学年及び第6学年」では、意図に応じて複数の資料等を関係付けながら話したり・聞いたり、書いたり、読んだりすることが求められている。

2 内容

上記の内容は言語活動を通して指導されるのであるが、その際は、指導が効果的になされるよう、「思考力、判断力、表現力等」において、内容ごとに学習過程が示されている。

「A 話すこと・聞くこと」

- 話題の設定、情報の収集、内容の検討
- 構成の検討、考えの形成（話すこと）
- 表現、共有（話すこと）
- 構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）
- 話合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）

「B 書くこと」

- 題材の設定、情報の収集、内容の検討
- 構成の検討
- 考えの形成、記述
- 推敲
- 共有

「C 読むこと」

- 構造と内容の把握
- 精査・解釈
- 考えの形成
- 共有

3 指導上の留意点

- ・主体的・対話的で深い学びを実現するための工夫をすること。
- ・読書指導の改善・充実を図ること。
- ・外国語活動・外国語科と連携を図ること。
- ・言語能力の育成に向けて、教科横断的な視点から教育課程の編成を図ること。
- ・情報収集や情報発信の手段として情報機器を活用すること。

1 単元名 「登場人物を紹介しよう - 『一つの花』他 -」

2 子供と単元

(1) 子供の実態

前単元では、『白いぼうし』(光村4年)や関連作品を読み、登場人物の性格について考えた。行動や会話に関わる叙述を結び付けて読んだり、関連作品を読み比べたりすると、登場人物の性格が具体的に想像できることを捉えてきた子供たちである。

本単元では、『一つの花』(光村4年)を主教材として、家族の絆を題材とした作品を複数読み、登場人物の気持ちの変化を考える。『一つの花』は三人称客観視点で書かれており、一読しただけでは登場人物の心の内を想像することが難しい。そのため、複数の場面の叙述を結び付けて、登場人物の気持ちの変化を読み深めていく子供の姿が期待できる。

(2) 主な指導内容

本単元の指導内容を、「複数の場面の叙述を結び付けると、登場人物の気持ちの変化を読み深められること」とおさえた。これは小学校学習指導要領解説 国語科編の第3学年及び第4学年の内容2[思考力・判断力・表現力等]、C読むこと「エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり」と結び付けて具体的に想像すること。」を受けている。

3 単元の目標

家族の絆を題材とした作品を複数読み、家族の思いについて叙述を基に仲間と話し合う中で、複数の場面の叙述を結び付けると登場人物の気持ちの変化を読み深められることを理解し、叙述を根拠にして家族の思いを登場人物紹介カード表すことができる。

4 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使っている。	登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。	進んで、登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わりと結び付けて想像しようとしている。

5 指導の構え

○家族の関わりを描いた作品を複数読み、家族の思いを登場人物紹介カードに表す場の設定

子供が、家族の絆を題材とした作品をもっと読みたいと意欲を高めてきた状況で、家族の絆を題材とした作品を複数読み、家族の思いを登場人物紹介カードに表す場を設定する。このことにより、叙述を根拠にして、家族の思いを具体的に想像しようとする姿が期待できる。

○登場人物の気持ちの変化について、全文シートを用いて自分の読みを整理する場の設定

子供が、行動や会話に関わる叙述に着目して考えたいと意欲を高めてきた状況で、登場人物の気持ちの変化について、全文シートを用いて自分の読みを整理する場を設定する。このことにより、着目した叙述にサイドラインを引いたり、想像したことを書き込んだりして自分の読みをつくっていく姿が期待できる。

○登場人物の気持ちの変化について、全文シートの拡大版を用いて自他の読みを交流する活動の組織

子供が、仲間の考えも聞いてみたいと意欲を高めてきた状況で、登場人物の気持ちの変化について、全文シートの拡大版を用いて自他の読みを交流する活動を組織する。その際、場面を比較しながら話し合うことを大切にする。このことにより、複数の場面の叙述を結び付けて、登場人物の気持ちの変化を読み深める姿が期待できる。

6 単元計画 配当時間 7時間 本時 2次 5/7 時間

- 1次 ①②『一つの花』を読み、感想や疑問を基にして学習計画をつくろう。
- 2次 ③お母さんは、どうして自分のおにぎりをゆみ子に分けたのか。
④お父さんは、どうしてゆみ子をめっちゃくちゃに高い高いしたのか。
⑤◎お父さんは、どんな気持ちで「一つの花」を見つめていたのか。(本時)
- 3次 ⑥自分が選んだ本で人物紹介カードを書こう。
⑦人物紹介カードを読み合い、学習のまとめをしよう。

7 本時の指導計画 (本時5/7)

(1) 主眼

「一つの花」を見つめる父の気持ちについて叙述を基に仲間と話合う中で、複数の場面の叙述を結び付けると、ゆみ子の幸せを願う父の気持ちが読み深められることを理解し、「一つの花」にこめた父の思いを人物紹介カードに書くことができる。

(2) 展開

過程	子供の学びの広がり・深まり	留意点 ○主な手立て
見直しをもつ10分 ／ 解決する25分 新たな問題を見出す10分	<p style="text-align: center;">子供の学びの広がり・深まり ＜A児の追求＞</p> <p>お父さんは「高い高い」をすることで食べ物では得られない喜びをゆみ子にあげようとした。次は、お父さんが何も言わずに汽車に乗って行ってしまったのはなぜなのか考えたい。 父が何も言わずに汽車に乗って行ってしまった理由について考えたいと意欲を高めている。</p>	<p style="text-align: center;">留意点 ○主な手立て ＜スタートの意識＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お父さんは、どうして何も言わずに汽車に乗って行ってしまったのかな。
	<p>T1 お父さんは、どうして何も言わずに汽車に乗って行ってしまったのでしょうか。</p> <p>「一つの花を見つめながら。」とあるから、「一つの花」を見ながら何か考えていたんじゃないかな。でも、どんな気持ちかはっきりしない。「一つの花」を見つめる父の気持ちについて、詳しく読んで確かめたいと意欲を高めてくる。</p> <p>◎お父さんは、どんな気持ちで「一つの花」を見つめていたのか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○父の行動の理由について、自他の解釈を聴き合う活動の組織
	<p>T2 前後の場面を比べながら読み、自分の考えをノートに書きましょう。</p> <p>「高い高い」をした2場面では、まだ戦争に行くとは決まっていないけど、3場面では戦争に行く汽車に乗らなければならなくなっている。そんな状況だから、ゆみ子に幸せになってほしいという気持ちをこめて「一つの花」を見つめていたんだな。 複数の場面の叙述を結び付けると、ゆみ子の幸せを願う父の気持ちが読み深められることを理解し、「一つの花」を見つめるお父さんの思いを人物紹介カードに書きたいと意欲を高めてくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○全文シートを用いて読みを整理する場の設定 ○叙述を基に仲間と話し合う活動の組織 評) 複数の場面の叙述を結び付けると、ゆみ子の幸せを願う父の気持ちが読み深められることを理解しているか (発言, 記述)
<p>T3 「一つの花」を見つめるお父さんの思いを人物紹介カードに書きましょう。</p> <p>2場面と3場面の状況を比べて読んだら、「一つの花」を見つめるお父さんの思いがはっきりした。他の作品も読んで、登場人物紹介カードを書きたいな。 「一つの花」を見つめる父の思いを人物紹介カードに書き加えることができ、他の作品も読んでみたいと意欲を高めていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○「一つの花」に込めた父の思いを登場人物紹介カードにまとめる場の設定 評) 「一つの花」を見つめる父の思いを人物紹介カードに書くことができたか (記述) 	

(3) 評価方法

「一つの花」を見つめる父の思いを書いた人物紹介カードの記述から、複数の場面を結び付けて、ゆみ子の幸せを願う気持ちが読み深められたかを評価する。

【道徳科】

1 目 標

学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、子供の発達段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。

（「第1章 総則」の「第1 教育課程編成の一般方針」の2 前段）

道徳教育推進上の配慮事項は次の4点である。

- 1 道徳教育の指導体制と全体計画
- 2 指導内容の重点化
- 3 豊かな体験活動の充実といじめの防止
- 4 家庭や地域社会との連携

道徳科が目指すものは、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標と同様によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。

道徳科の目標

第1章総則の第1の2に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

道徳教育…学校教育全体を通して行う。
道徳教育の全体計画に示される。

道徳科 …道徳科以外における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によって補ったり、深めたり、相互の関連を考えて発展させ、統合させたりする。
年間指導計画に示される。年間35時間（1年生34時間）

2 内 容

（1）内容構成の考え方

道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目を以下の四つの視点から、「第1学年及び第2学年」、「第3学年及び第4学年」、「第5学年及び第6学年」の学年段階に分けて示している。

- A 主として自分自身に関すること
- B 主として人との関わりに関すること
- C 主として集団や社会との関わりに関すること
- D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

道徳の内容項目は「第1学年及び第2学年」が19項目、「第3学年及び第4学年」が20項目、「第5学年及び第6学年」が22項目にまとめられている。小学校から中学校までの内容の体系性を高めるとともに、構成やねらいを分かりやすく示して指導の効果を上げるなどの観点から、それぞれの内容項目に手掛かりとなる「善悪の判断、自律、自由と責任」などの言葉が付記されている。

（2）道徳科の指導計画

各学校においては、校長の方針のもとに道徳教育の推進を主に担当する教師を中心に、全教師が協力して道徳教育を展開するため、「道徳教育の全体計画」とそれに基づく「道徳科の年間指導計画」及び「学級における指導計画」を作成する必要がある。

- ①道徳教育の全体計画…学校における道徳教育の基本的な方針を示すとともに、学校の教育活動全体を通して、道徳教育の目標を達成するための方策を総合的に示した教育計画である。
- ②道徳科の年間指導計画…道徳科の指導が、道徳教育の全体計画に基づき、児童の発達の段階に即して計画的、発展的に行われるように組織された全学年にわたる年間の指導計画である。
- ③学級における指導計画…全体計画を児童や学級の実態に応じて具体化するものであり、学級において教師や児童の個性を生かした道徳教育を展開する指針となるものである。

3 道徳科の指導

(1) 学習指導案の内容

学習指導案は、教師の指導の意図や構想を適切に表現することが好ましく、各教師の創意工夫が期待される。一般的には次のような事項が取り上げられている。

- ア 主 題 名 …原則として年間指導計画における主題名を記述する。
- イ ねらいと教材 …年間指導計画を踏まえてねらいを記述するとともに教材名を記述する。
- ウ 主題設定の理由…年間指導計画における主題構成の背景などを再確認するとともに、①ねらいや指導内容についての教師の捉え方、②それに関連する子供のこれまでの学習状況や実態と教師の願い、③使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活用方法などを記述する。
- エ 学習指導過程 …一般的には、学習指導過程を導入、展開、終末の各段階に区分し、子供の学習活動、主な発問と予想される子供の発言、指導上の留意点、指導の方法、評価の観点などを指導の流れに即して記述する。

(2) 道徳科に生かす指導方法の創意工夫

ねらいを達成するには、子供の感性や知的な興味などに訴え、子供が問題意識をもち、主体的に考え、話し合うことができるように、ねらい、子供の実態、教材や学習指導過程などに応じて、最も適切な指導方法を選択し、工夫して生かしていくことが必要である。

- ① 教材を提示する工夫
- ② 発問の工夫
- ③ 話合いの工夫
- ④ 書く活動の工夫
- ⑤ 動作化、役割演技など表現活動の工夫
- ⑥ 板書を生かす工夫
- ⑦ 説話の工夫

これらのことを主題のねらいや学年の発達段階、学級の実態に応じて工夫して取り入れた授業を行う。

4 評価について

<道徳教育の評価>

教師が子供の人間的な成長を見守り、子供自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付ける働きをもつようにする。

<道徳科の評価>

- ・数値による評価ではなく、記述式であること。
- ・他の子供との比較による相対評価ではなく、子供生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め、励ます個人内評価として行うこと。
- ・他の子供生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまないことに留意する必要があること。
- ・個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと。
- ・発達障害等の子供についての配慮すべき観点等を学校や教員間で共有すること。
- ・現在の指導要録の書式における「総合的な学習の時間の記録」、「特別活動の記録」、「行動の記録」及び「総合所見及び指導上参考となる諸事項」などの既存の欄も含めて、その在り方を総合的に見直すこと。

第2学年〇組 道徳科学習活動案

〇年〇月〇日 (〇) 第〇校時
指導者 〇〇 〇〇

- 1 主題名 **がんばりのあとには A-5 希望と勇気, 努力と強い意志**
(教材名:『あと少し』 小学どうとく はばたこう明日へ2 (教育出版))

2 児童と主題

(1) 児童の実態

本主題では、教材「あと少し」(教育出版)を基に、やるべきことをやり遂げるよさを考える。子供たちは、登場人物「ぼく」ができるまで頑張れたことについて、うまくいかなくても努力して二重とびができるようになったことやできなくても何度も練習したことに目が向くだろう。そこで、「ぼく」のようにうまくいかない時の自分の気持ちをハートメーターを使って考える場を設定する。すると、自分には諦めたい気持ちがあるのに、ぼくができるまで頑張れたのはなぜか明らかにしたいと意欲を高めてくる。そこで、「ぼく」がやめてしまいたい気持ちを乗り越えてできるまで頑張った時の気持ちを話し合う活動を組織する。仲間と話し合う中で、やるべきことを諦めずにやり遂げると自分の成長を感じることに気付くだろう。すると、具体的に自分が頑張りたいことを考えてみようという意欲を高めてくる。そこで、主題の学びをこれからの生活場面でどのように生かしていくか考える場を設定する。このことにより、これからの生活の中で自分もやるべきことを諦めずにやり遂げようという意欲を高める姿が期待できる。

(2) 主な指導内容

本主題は、小学校学習指導要領特別の教科道徳編の「第3章第2節内容項目の指導の観点 A 主として自分自身に関すること 5 希望と勇気, 努力と強い意志 第1学年及び第2学年 自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行うこと」を受けている。そこで本主題の学習内容を「やるべきことをやり遂げると自分の成長を感じる」と押さえた。

3 主題の目標

主人公が諦めずに練習し続けた姿と自分の経験を関連させながら、努力を続けることのよさを仲間と話し合う中で、やるべきことをやり遂げると自分の成長を感じられることに気づき、これからの生活の中で、自分のやるべきことをやり遂げようとする意欲を高める。

4 評価基準

道徳的価値の理解	多面的・多角的な見方への発展	自分自身との関わりでの価値の深まり
・自分のやるべきことをやり遂げると自分の成長を感じることに気付いている。	・やり遂げることの価値について、様々な立場や場面で捉えたり考えたりしている。	・これからの生活の中で努力し続けたいやるべきことを具体的な行動で考えている。

5 指導の構え

○ うまくいかない時の自分の気持ちをハートメーターを使って考える場の設定

アンケートを基に、自分の経験を想起しながら、うまくいかない時の自分の気持ちを考える。さらに、ハートメーターを活用し、気持ちを可視化することで、自分の経験とぼくの行動、頑張りたい気持ちとやめたい気持ちを比較しながら考える姿が期待できる。

○ 「ぼく」ができるまで頑張れた時の気持ちを話し合う活動の組織

「ぼく」の立場に立って気持ちを考え、「ぼく」ができるまで頑張れた時の気持ちを話し合う。仲間と考えを交流しながら、やり遂げることの価値について多面的・多角的に考えを深めていく姿を期待できる。

○ 本主題の学びをこれからの生活場面でどのように生かしていくか考える場の設定

やるべきことを諦めずにやり遂げると、自分の成長を感じることをこれからの生活の中でどのように生かしていくか考えることができるようにする。具体的なこれからの自分を想像しながら、自分の行動を考える姿が期待できる。

6 本時の展開

過程	子どもの学びの広がり・深まり		留意点
問いをもつ・見通しをもつ10分	<p>〈A 児の追求〉</p> <p>できるだけ練習を続けたことはすごいな。</p> <p>教師の範読を聞き、「ぼく」がうまくいなくても頑張ったことに目が向いてきている。</p> <p>T1 「ぼく」のように頑張りたいけどうまくいかない時、自分ならどんな気持ちですか。</p> <p>途中でやめたくない気持ちもあるかもしれないけど、やっぱりできるだけまで頑張ると思う。私ならあきらめたくないのに、「ぼく」は、どうして頑張れたのかな。</p>	<p>〈B 児の追求〉</p> <p>休み時間も家でも何回も練習したことがすごいな。</p> <p>途中で諦めたくないこともあるかもしれない。ぼくならやめちゃうかもしれないのに、「ぼく」は、なんで頑張れたのかな。</p> <p>自分には諦めたい気持ちがあるのに、ぼくができるまでがんばれたのはなぜか明らかにしたいと意欲を高めてくる。</p> <p>◎ 「ぼく」ができるまでがんばれたのはなぜだろう。</p> <p>T2 「ぼく」が頑張れた時の気持ちを話し合おう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 事前のアンケートで、諦めてしまった経験や2年生で頑張りたいことを聞いておく。 教材文「あと少し」を範読しながら、場面絵を黒板に提示していく。 <p>○「ぼく」のようにうまくいかない時の自分の気持ちをハートメーターを使って考える場の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> 事前アンケートにも触れ、子供たちの経験を想起させ、やり遂げられない時の気持ちを考えさせる。 <p>○「ぼく」ができるまで頑張れた時の気持ちを話し合う活動の組織</p>
問いを解決する25分	<p>二重とびが跳べるようになるためには、頑張ったたくさん練習するしかない。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>できるだけ頑張ったら、今より成長するんだ。私も、頑張れる自分になりたいな。</p>	<p>絶対に跳べるようになりたいから、跳べるまで練習を頑張るぞ。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>できるようになるまで頑張れば、本当に嬉しい気持ちになれるんだな。ぼくも最後まで頑張りたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 吹き出しに気持ちを書き込むことで「ぼく」の立場に立って考える。 やり遂げるよさを見付けたら、自分の立場で考えさせる。
実践への意欲化を図る10分	<p>T3 今日学んだことをこれからどんな場面で生かせそうですか。</p> <p>今日は、できるだけ頑張ると今までより頑張れる自分になれることが分かった。これから、ピアノの発表会でうまく弾けるように諦めないで頑張れる自分になりたい。</p> <p>これからの生活の中で、やるべきことを努力し続けようとする意欲を高めていく。</p>	<p>今日は、頑張ると本当に嬉しい気持ちになると分かった。これから算数の勉強を頑張れば、すごい自分になって嬉しいと思う。</p>	<p>○本主題の学びをこれからの生活場面でどのように生かしていくか考える場の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ハートメーターを使って、学習後の自分の気持ちを表す。 事前アンケートを用いて本時の学習を振り返らせる。 <p>評：発言、ワークシートへの振り返りの記述、ハートメーターから、評価する。</p>

7 評価方法

ハートメーターへの振り返りの記述から、これからの自分の生活の中でやるべきことをやり遂げ、自分の成長に向けて努力しようとする意欲が高まったかを評価する。

【体育科】

1 目 標

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
- (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。
- (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

- <第1・2学年>
- (1) 各種の運動遊びの楽しさに触れ、その行い方を知るとともに、基本的な動きを身に付けるようにする。
 - (2) 各種の運動遊びの行い方を工夫するとともに、考えたことを他者に伝える力を養う。
 - (3) 各種の運動遊びに進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、健康・安全に留意したりし、意欲的に運動する態度を養う。

- <第3・4学年>
- (1) 各種の運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方及び健康で安全な生活や体の発育・発達について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
 - (2) 自己の運動や身近な生活における健康の課題を見付け、その解決のための方法や活動を工夫するとともに、考えたことを他者に伝える力を養う。
 - (3) 各種の運動遊びに進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、友達の考えを認めたり、場や用具の安全に留意したりし、最後まで努力して運動をする態度を養う。また、健康の大切さに気付き、自己の健康の保持増進に取り組む態度を養う。

- <第5・6学年>
- (1) 各種の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方及び心の健康やけがの防止、病気の予防について理解するとともに、各種の運動の特性に応じた基本的な技能及び健康で安全な生活を営むための技能を身に付けるようにする。
 - (2) 自己やグループの運動の課題や身近な健康に関わる課題を見付け、その解決のための方法や活動を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝える力を養う。
 - (3) 各種の運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に留意したりし、自己の最善を尽くして運動する態度を養う。また、健康・安全の大切さに気付き、自己の健康の保持増進や回復に進んで取り組む態度を養う。

2 内 容

体育科の内容は、運動領域と保健領域に分けられ、運動領域の内容の構成は基本的に、低・中・高学年の3段階で示され、各学年での運動の取り上げ方や年間計画においても弾力性をもたせることができるようにされている。保健領域は、第3学年から第6学年まで取り上げられている。

<運動領域>

学年	1・2	3・4	5・6
領域	体づくりの運動遊び	体 っ く り 運 動	
	器械・器具を使つての運動遊び	器 械 運 動	
	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸 上 運 動
	水遊び	水 泳 運 動	
	ゲ ー ム		ボ ー ル 運 動
	表現リズム遊び	表 現 運 動	
		保 健	

- ア 体づくり運動 心と体の関係に気付くこと、体の調子を整えること、仲間と交流することなどの体ほぐしをしたり、体力を高めたりするために行われる運動である。
 ・「体ほぐしの運動」、「多様な動きをつくる運動遊び」(低学年)、「多様な動きをつくる運動」(中学年)、「体の動きを高める運動」(高学年)
- イ 器械運動系 ①「器械・器具を使つての運動遊び」(低学年)
 ・「固定施設を使つた運動遊び」、「マットを使つた運動遊び」、「鉄棒を使つた運動遊び」、「跳び箱を使つた運動遊び」
 ②「器械運動」(中・高学年) ・「マット運動」、「鉄棒運動」、「跳び箱運動」
- ウ 陸上運動系 ①「走・跳の運動遊び」(低学年)・「走の運動遊び」、「跳の運動遊び」
 ②「走・跳の運動」(中学年)
 ・「かけっこ・リレー」、「小型ハードル走」、「幅跳び」、「高跳び」
 ③「陸上運動」(高学年)
 ・「短距離走・リレー」、「ハードル走」、「走り幅跳び」、「走り高跳び」
- エ 水泳系 ①「水の中を移動する運動遊び」、「もぐる・浮く遊び」(低学年)
 ②「浮いて進む運動」、「もぐる・浮く運動」(中学年)
 ③「水泳」(高学年) ・「クロール」、「平泳ぎ」
 ・「安全確保につながる運動」
- オ ボール運動系 ①「ゲーム」(低・中学年)
 ・「ボールゲーム」、「鬼遊び」(低学年)
 ・「ゴール型ゲーム」、「ネット型ゲーム」、「ベースボール型ゲーム」(中学年)
 ②「ボール運動」(高学年)
 ・「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」
- カ 表現運動系 ①「表現リズム遊び」(低学年) ・「表現遊び」、「リズム遊び」
 ②「表現運動」(中・高学年)
 ・「表現」、「リズムダンス」(中学年)
 ・「表現」、「フォークダンス」(高学年)

<保健領域> (3~6学年)

「健康な生活」、「体の発育・発達」、「心の健康」、「けがの防止」及び「病気の予防」

3 指導上の留意点

- (1) 各運動の特性をとらえ、運動の楽しさを味わうことのできる指導を大切にする。
運動には、競争する楽しさを味わう運動、できた喜びや達成した喜びを味わう運動、模倣したり自分のイメージを表現したりして楽しむ運動など様々な特性がある。各運動の指導において、その運動固有の楽しさを十分味あわせるようにする。
- (2) 子供の意欲を喚起し、自ら進んで課題解決に取り組むことのできる指導を工夫する。
子供一人一人の思いや願いを明らかにし、子供の立場から運動をとらえて教材づくりをしたり、学習過程を工夫したりして、子供がめあてに向かって自分の課題を把握し、活動を工夫するなど自主的・自発的に学習に取り組むことができるようにする。
- (3) 子供と共に運動する中で、児童の動きを見取り、一人一人に応じた援助をする。
子供一人一人は、運動に対する興味・関心、運動技能などの違いがある。この違いを認め、子供が今もっている力を出発点として運動に取り組むことから始め、一人一人に応じた手立てを工夫したり、励ましや賞賛したりするなどの個に応じた援助を大切にする。
- (4) 運動の特性、子供の実態に応じて、評価の工夫をする。
運動する子供自身が、めあてを決め、活動を工夫して、結果を基に修正するという自己評価活動を大切にする。また、仲間とのかかわり合いの中で教え合う、確かめ合うなどの相互評価の活動も取り入れる。そのために、学習カードを作成、活用し役立てる。
- (5) その他、特性に応じたグループ編成、用具や場の工夫、準備運動の工夫を心掛けて指導する。

第〇学年〇組 体育科学習指導案

令和〇年〇月〇日 (〇) 〇校時
授業者 教育実習生 〇〇 〇〇
指導者 教諭 〇〇 〇〇

1 単元名

できるかなできそうかな レベルアップランド

2 単元の目標

- ・助走を付けて片足でしっかりと地面を蹴って上方に跳ぶことができる。【知識・技能】
- ・よい動きや考えたことを友達に伝えることができる。【思考力・判断力・表現力等】
- ・走の運動遊びや跳の運動遊びに進んで取り組もうとしている。【学びに向かう力・人間性等】

3 単元の指導構想

(1) 指導内容

本単元は、学習指導要領体育科第2学年の目標(2)に準拠して設定する。

- (2) 各種の運動遊びの行い方を工夫するとともに、考えたことを他者に伝える力を養う。(中略) 教師から提案された楽しみ方や、自己や友達が考えた楽しみ方から、自己に合った楽しみ方を選択することもその一つである。

本単元では、自由な運動遊びで感じた感覚を基に、自分の目標をもち、他者からのアドバイスによって視点を心得、達成に向けた動き方を考えるように構成する。

そのための指導の重点を二つとする。一つ目は、子供が自分の遊びたい物を選んで活動することができ、自分に合った目標をもつことができるようにすることである。二つ目は、子供が自分の新たな動き方を自覚することができることである。そのために、グループで、それぞれの目標を共有する場を設定する。このとき、実際にやって見せて仲間から具体的なアドバイスをさせる。そうすることで、子供は動き方を知り、他者からのアドバイスを受けて、自分の動き方に対して新たな視点を心得る。

このような指導により、子供は、目標に向かって他者から得た視点をもちながら自分の動き方について考え、自分に合った動きを身に付けていく。

(2) 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
・三段階の難易度で構成される運動の場における用具を用いた動きについての知識・技能。	・自分の動き方について考えたり自覚したりして動き方を工夫する力。	・友達の目標を共有し誰とでも仲良く関わり合いながら運動遊びをしようとする態度。

(3) 子供の実態

本学級の子供は、体育学習について意欲的である。できないことや難しいことに対しても積極的に取り組んで挑戦しながら活動している。動き方について詳しく問う場面では、思ったことや考えたことを積極的に発言する子供も多い。このような子供の意欲的かつ積極的な姿を仲間との関わり合いにつなげ、互いに動き方を見合ったり教え合ったりする姿を目指す。

(4) 指導の構想

手立て1：難しかった運動遊びと難しかったことやできるようになりたいことを問う。

3段階の難易度がある運動遊びを経験させ、難しさを明らかにして課題を焦点化し、自分に合った目標をもたせるための働き掛けである。

まず、難しかった運動遊びとどこが難しかったかを問う。やりにくかった運動遊びの難しさを明確にするためである。次に、できるようになりたいことを問う。課題を中核的な内容である「自分の動き方」に焦点化させるためである。

手立て2：グループ分けを提示し、実際に動きを見せながら話し合う場を設定する。

グループに分かれて、自分の目標を伝えさせ、実際にやって見せて仲間からアドバイスを得させるための対話を支える働き掛けである。

まず、同じ運動遊びを目標とする3段階のレベルが混在する3～4人グループに分ける。次に、実

際に動きを見せながら話し合う場を設定する。自分の目標を伝えさせ、実際にやって見せて仲間から具体的なアドバイスを得させるためである。

手立て3：自分の映像を見る場を設定し、どのように動いたかと思ったことを問う。

どのように動いているのかを知らせ、自分がどんな動き方ができるようになったのかを明らかにさせるための働き掛けである。

まず、自分の映像を見る場を設定し、どのように動いたかと思ったことを問う。自分がどのように動いたかを自覚し、自分がどんな動き方ができるようになったのかを明らかにさせるためである。

4 指導計画（全5時間）

時	学習のねらい	主な学習活動
1	◎お気に入りの遊びを見付けよう。	○遊び場で遊ぶ。
2	◎たくさん挑戦してできた遊びを紹介しよう。	○好きな遊びを選んで、たくさん挑戦する。
2	◎どうすれば、目標とする動きができるようになるのかな。	○できるようになりたい遊びを目標にして、友達と互いに助言し合って動きを試す。
4	◎選んだ遊びを、どんなふう組み合わせればよいか。	○取り入れたい遊びを選んで、レベルアップランドを作る。
5	◎レベルアップランドで、一番楽しかった遊びを振り返ろう。	○みんなでレベルアップランドを楽しむ。

5 本時の構想

(1) ねらい

ゴム跳び遊びの実際の動き方を基に、友達とアドバイスし合う活動を通して、動き方の視点を理解し、達成に向けた動き方を考えることができる。

(2) 展開（本時3／5時）

学習活動と予想される子供の反応	教師の働き掛け
<ul style="list-style-type: none"> ○ 3段階の難易度がある運動遊びを経験し、難しさを明らかにして、自分に合った目標をもつ。 ・ 輪くぐりのところは、大きい輪は簡単だったけど、輪が小さくなったら当たっちゃった。 ・ ゴム跳びは、ゴムが高くなると難しいな。 ・ 高くてもゴムを揺らさないで跳びたいな。 ・ もっと高いゴム跳びがあったらやってみたいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 難しかった運動遊びとどこが難しかったのかを問い、できるようになりたいことを問う。 ・ 発問「もうちょっとでできそうなのにできない遊びやちょっと難しい遊びはありましたか。それはどこで困っていますか」 ・ 発問「どんなことができるようになりたいですか」 ※ どれも全部できる子供には、どの運動遊びでどう動けるようになりたいかを問う。
<ul style="list-style-type: none"> ○ どのように動いているのかを知り、自分がどんな動き方ができるようになったのかを明らかにする。 ・ 前の足は跳べている。あとちょっとだ。 ・ 後ろの足があんまり上がってないから、今度はもっと遠くから斜めに跳んでみようかな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の映像を見る場を設定し、どのように動いたかと思ったことを問う。 ・ 指示「友達から撮ってもらった動画を見ましょう」 ・ 発問「目標に近づくようにどのようにやってみましたか。やってみて、どう思いましたか」

(3) 評価

自分の動き方について、実際に動きを見せながら話し合うことを通して、自分の動きの調整を図っているかをワークシートの記述から評価する。

6 複式学級の指導

(1) 複式学級成立の根拠

① 「学級」の成立と「学年制」

「学級」という考え方は近代以前にはなく、学校が就学義務の体制下におかれる近代になって初めて生まれた。知識・技能を子供生徒に習得させるための能率化をねらったもので、「等質的な子供生徒」を教室に収容して一斉授業という授業形態をとる。

「等質的な子供生徒」は、大体において同じ年齢であれば等質的であろうと考えて「学年制」の中で集められる。これは、同一の年齢の生徒で一つの集団を区切り、一定の期間が経過すれば全員が進級する制度である。この学年制という考え方を取り上げたのは、近代教育の父といわれるコメニウス(Comenius, J. A., 1692～1670, チェコスロバキア)であった。

我が国は明治5年(1872年)に学制を布いて就学を奨励した。明治19年(1886年)には、小学校令で義務教育を明らかにするとともに、文部省令で「尋常小学校ニ於テハ80人以下(中略)ハ教員一人ヲ以テ之ヲ教授スルコトヲ得」として、学級を想定している。明治24年の「学級編制等ニ関スル規則」の説明書で「学級ト称スルハ一人ノ本科教員ノ一教室ニ於テ同時ニ教授スヘキ一団ノ児童ヲ指シタルモノニシテ(中略)其一学級ハ一学年ノ児童ヲ以テ編制スルコトアルヘク又ハ数学年ノ児童ヲ合セテ編制スルコトモアルヘシ」と学級の概念を詳細に規定した。

② 学級編制と複式学級

学級を構成することを「学級編制」という。この学級編制は、一定の法律基準に従いながら、学校が編制することになる。ここでまず問題になるのは、一学級の子供生徒の人数である。

我が国では、明治19年(1886年)の文部省令で、一学級の子供生徒の人数は「80人以下」としていたが、昭和16年(1941年)の国民学校令施行規則で「60人以下」となって、戦後学校教育法施行規則で「50人以下を標準とする」とされた(第20条)。

小学校の学級編制は、小学校設置基準第5条では、「小学校の学級は、同学年の児童で編制するものとする。ただし、特別の事情があるとき、数学年の児童を一学級に編制することができる。」としている。この条文でいう「特別の事情」とは、公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律(以下「標準法」)によれば、「児童または生徒の数が著しく少ないか『その他特別な事情がある場合』」である。(「その他特別な事情」とは、特別支援教育をさす。)

現在、「標準法」では、小学校の学級編制基準を、次の数を基準として都道府県の教育委員会が定めることとしている。

- | |
|----------------------------------|
| ・同学年の児童で編制する学級(単式) ……………一学級40人 |
| ・二つの学年の児童で編制する学級(複式) ……………一学級16人 |
| ※第1学年を含む学級にあっては一学級8人 |

複式学級、つまり、二つの学年の児童によって構成される学級は、こうして同学年の児童が少ないときに、法律・政令の定めるところによって編制されるのである。複式学級に対して、同学年の児童によって構成される学級を「単式学級」と呼ぶのが通例である。

(2) 複式学級観

① 二つの複式学級観

複式学級観として、次の二点が挙げられる。

- 1) 変則的な学級編制であるとする見方
伝統的な学年制度からみた複式学級観
- 2) 学級編制の一つとして、これを有効に利用していこうとする見方
学年にとらわれない生活集団的な複式学級観

② 積極的な複式学級観

複式学級は法令上の変則的性格をもたせられて設けている。しかし、設けられ方は"変則的"であっても、学級にいる子供と教師の人間関係は、教育的に有効なものでなければならない。

複式学級は、生年月日が2か年に亘る子供によって構成されている。"一つの学級"である。そこには、1年早く入組した子供と遅く入組した子供とがおり、いずれも2年間過ごすのであり、先に来た者と後から来た者とが1年間共に過ごすのである。そして、そこには、共に学ぶ子供たちがいるのである。

複式学級では上学的立場と下学的立場を繰り返すことによって無意識的にも影響し合い、切磋琢磨することによって、単式学級とは違った豊かな人間関係をつくり、社会性が伸ばされていく面が見られる。学習場面においても子供同士が学年の枠を超えて、時にはリーダーとなり、フォロアーとなって、自分の考えをタテ・ヨコ双方に存分に交流させ合いながら、学習を深めるのである。

ここには、単式学級に追随した学習指導ではなく、正に複式学級でなければならない学習指導や教育が行われるのであり、複式学級の存在を積極的に認める考え方がある。

(3) 学級経営

複式学級では、上下学年がともに一つの教室で生活し、学習する。このことによって、単式学級では見られない教育効果が期待できる。一つは人間関係における教育効果であり、もう一つは学習指導における教育効果である。

① 豊かな人間関係の醸成

複式学級では、学年の違う子供の縦のつながりを生かした、よりよい人間関係が育つことが期待できる。複式学級では、ちょうどきょうだい関係のように上学年の子供が、学級生活のいろいろな面について案内、助言することで、下学年の子供に生活の仕方やルールを伝えていく。このことによって、学習、係活動、遊び等に伝承性と発展性とが生まれる。単式学級とは違った縦の人間関係を経験することで、社会性が伸ばされていくのである。

また、上学年の子供の優れた考えや技能にあこがれ、それに学ぼうとしたり、挑戦したりする下学年の動きが見られる。あるいは、下学年の子供に負けまいと、より多面的に考えたり、リーダーシップを発揮したりする上学年の子供の姿が現れる。互いに刺激し合うことで、上学年、下学年ともに向上していくのである。

さらに、学年の枠を超えて、時にはリーダーとなり、時にはフォロアーとなることがある。上下学年という関係だけでなく、学習内容や活動内容によって立場が入れ替わるのである。リーダーとフォロアーの両方を経験することのできる複式学級では、お互いに相手の存在を肯定的にとらえ、尊重し合える「人間関係力」が育つことが期待される。これは、少子化・個人主義的な社会の中で、ますます希薄になっている人間関係を形成する上で必

要な力と言える。その上、複式学級は少人数を生かし、まとまりのある子供たちの行動が見られる。わずか16人のクラスである。グループを作って対立したり、男女が分裂したりしては、何事も達成できないことを身をもって体験している。だからこそ、いっそう上下学年が協力して問題に立ち向かい、解決していこうとする姿が見られるようになるのである。

② 学習指導の構え

複式学級における学習指導の教育効果を現実のものとするために、次のことを大切にしていって日々の学習活動に当たる必要がある。

- 一人一人の子供が自分のなりの考えをもてるように、課題や発問を工夫するとともに、思考の跡がたどれるノートやプリントの書き方及び端末の操作の仕方を指導すること。
- 上下学年の子供相互の意見交流が活発にしかもスムーズに行えるように、発言の仕方や話し合いの仕方を、発達段階や学級の特性を考慮して指導すること。
- 個々の子供の学習状況を確実に把握しながら適切な助言や支援を行うこと。

少人数学級であることは、プラス面とマイナス面とがある。例えば、対象とする人数が少ないからこそ、子供たちを多面的にしかもより客観的に観察でき、一人一人に応じた指導ができやすいということはプラス面である。反面、少人数であることから、子供たちの思考範囲が相対的に狭くなったり、集団活動の盛り上がりには欠けたりすることもある。これがマイナス面である。

そこで、プラス面を活用することで、子供を伸ばし、教師が「ゆさぶり」をかけたりに、活動に加わったりすることで、マイナス面をプラス面に転換していく。そういう配慮をすることが、複式学習指導における「指導上のポイント」である。

一人一人の能力や個性をきめ細かくとらえ、個に応じた指導を適宜取り入れたり、能力や個性の違いを全体の指導に位置付けたりすることで、一人一人の子供を生かす。少人数学級の利点を活用し、一人一人を生かす指導をするために、例えば、次のような学習指導が構想できる。

- ・ 課題や発問に対する反応や応答の違いを個に応じて想定し、教師の対応策を具体的に設定して指導に当たる。→ 個別の学習指導計画の作成
- ・ 授業中に表れた子供の「つまずき」や「こだわり」を大切し、「つまずき」や「こだわり」を契機とした学習の展開を図る。→ 個の問いを表出させる場の設定
- ・ 全員に学習リーダーを経験させ、学び方・話し合いの仕方を習得させる。

(4) 学習指導方法

① 直接指導・間接指導

「直接指導」……教師が子供と対面して、直接的に指導する授業形態

「間接指導」……教師と子供が対面関係になく、教師が間接的に指導する授業形態

この二つの授業形態は、異なった学年が異なった内容を一つの教室で学習するという考えから生み出されたもので、「学年別指導」というものである。この複式学級における直接・間接指導における問題点は、次のように整理される。

- 1) 直接指導の時間が少ないため、導入に十分な時間が取れない。
- 2) 他学年に移る必要があるため、理解が十分に図れないまま練習に取り組みせなければならなくなる。
- 3) 直接指導の時間が少ないため、能力差に応じた指導が徹底できない。
- 4) それぞれの学年が異なった内容を学習するため、他の学年の学習に気を取られやすい。

- 5) それぞれの学年が異なった内容を学習するため、教師の教材研究、準備等にかかる時間が多くなる。
 - 6) それぞれの学年が別々に行動することが多くなり、学級集団のもつ教育的意義を生かしくくなる。
- しかし、見方を変えると直接・間接指導には、次のような利点もある。
- 子供自身が学習を進めなければならないために、自律の態度が養われる。
 - 全員が学び方・話し合いの仕方を身に付けやすい。
 - 間接指導の時間が多いということは、一人一人が考える時間や考えを表出する時間が確保されるということである。

② 共につくる授業

附属新潟小学校では、昭和46年の複式学級設置以来、一貫して異学年の子供が共に学習する授業を求め、同単元・同内容・同教材による指導で、個に応じた指導の在り方を探ってきている。これは、学年別の直接・間接指導における困難点を克服するとともに、教育における学校や学級の在り方や子供にとっての学級とは何なのか、学習とはどのような姿なのかを厳しく問うことによって、複式学級を積極的に認めようとする立場から生まれたものである。

同単元・同内容・同教材による指導の利点として、以下のことが挙げられる。

- 1) 学級内の学習雰囲気が統一され、落ち着いた学習が可能となる。
- 2) 他学年の子供から学習を妨害されることがなく、現在の学習に注意が集中し、発表も活発に行われるようになる。
- 3) 学級の全員が同時に学習するので、学級集団としての協力的な態度が養われる。それにより、上下学年の子供の相互理解が深まっていく。
- 4) 間接指導のために課していた自習や練習がなくなり、理解のための十分な時間が確保できる。
- 5) 教材研究や教具の準備が分散せずに済むため、能率的な指導が可能となる。
- 6) 指導目標や指導内容が同一なので、落ち着いたゆとりのある指導ができる。
- 7) 一人一人の子供の能力や個性に応じた指導をする時間が生まれる。
- 8) 導入に時間をかけて指導できるので、動機付けが十分に行われ、学習意欲がますます高まる。

現在、附属新潟小学校では、年間指導計画を国語・社会・理科・生活・体育・音楽・図画工作・家庭・道徳・総合的な学習の時間については、二つの学年の内容や教科書教材の系統を考慮しながら、二つの年度に配分するA B年度方式（2本案）をとっている。体育については、同じ内容・題材を繰り返す（1本案繰り返し方式）で作成し、同内容・同教材指導をしている。算数については、系統性の強い教科の特性から、異内容・異教材による指導をしているが、内容の近い単元ではできるだけ同時指導場面を設けることによって、「共につくる授業」を具現するために、次のことを特に配慮している。

- 子供の生活経験や能力差等の実態をとらえて、単元全体の指導を構想する。
- 学習意欲を高め、子供の問題意識を喚起することのできる教材を提示する。
- 評価を適切に行い、教師の働き掛けを見直す。

このことによって、子供が学年の枠を超えて素直に交流し合い、お互いに一人一人の考え方や在り方を認め合って学習を進めていく授業の姿を目指している。

- 参考文献 「複式学級論」(安部彦二郎著 東洋館出版社刊1962)
「へき地教育研究の課題」(めいけい出版社刊1980)
「授業の研究」(附属新潟小学校刊 第32～179号)
「研究紀要第48集」(附属新潟小学校刊1991)
「複式教育研究会紀要」(附属新潟小学校刊2001, 2010)